

# 引用節を伴う「思う」と「考える」の意味

高橋 圭介

キーワード 引用節、文型、「思う」／「考える」、類義語、多義語

## 1. はじめに

本稿の目的は、引用節を伴う「思う」と「考える」の意味を記述することである。これら二つの語は、ともに複数の文型をとる動詞である（この点については2節を参照）が、本稿ではその一部である引用節を伴う場合に考察対象を限定して意味分析を行うことになる。本稿における、以上のような方針は、文型の違いが意味の違いを反映している、言い換えれば文型が異なれば意味も異なる可能性があるのではないかという見通しに基づくものである。

「思う」にはヲ格名詞句を必須成分として伴う場合がある。

(1) 子供を思う親の気持ち

(1)の「思う」には、「子供」を<大切な存在>として捉えているといった意味特徴が認められるが、この意味特徴は、引用節を伴う「思う」には認められない特徴である。このように、ある一つの文型にのみ認められる特徴があるということから、文型ごとに意味を記述することによって、より整理の行き届いた分析になるのではないかと考えるわけである。

本稿では、以上のような方針に基づき、まず2節において、「思う」と「考える」がとりうる文型にはどのようなものがあるかを記述し、本稿における考察対象の（「思う」と「考える」全体の中での）位置付けを明確にする。3節では、従来、真偽判断のモダリティ形式との関係で問題とされてきた基本形文末用法の「と思う」について簡単に取り上げる。4節では、「思う」と「考える」を考察対象としている先行研究のうち、特に引用節を伴う「思う」と「考える」の意味記述を目的としているものを取り上げ、批判的に検討する。5節では、4節で明らかとなった先行研究の問題点を解決すべく、引用節を伴う「思う」と「考える」の分析を行う。

## 2. 「思う」と「考える」の文型記述

本稿では、「文型」を「動詞と、動詞が要求する必須成分とから成るまとまり」と考え、「思う」と「考える」にそれぞれ4つずつの文型を認める(注1)。まずは、複数の先行研究において「文型」と認定されているものを以下に挙げる。

### <「思う」の文型>

- ① [人] が [名詞 (句) (「文相当の成分+の、こと」を含む)] を思う  
例：故郷を思う。  
恋人のことを思う。
- ② [人] が [名詞 (句) (「文相当の成分+の、こと」を含む)] を  
[形容詞連用形] 思う (注2)  
例：父親の死を悲しく思う。  
試験に合格したことをうれしく思う。(注3)
- ③ [人] が [引用節] と思う  
例：彼は明日学校に来ると思う。(注：「思う」主体は「彼」ではない)  
休みがとれたら実家に帰ろうと思う。

### <「考える」の文型>

- ① [人] が [名詞 (句) (「文相当の成分+の、こと」を含む)] を考える  
例：数学の問題を考える。  
新しいアイデアを考える。
- ② [人] が [疑問詞を含む節] か (を) 考える  
[引用節] かどうか (を) 考える  
例：これからどうすればいいか考えた。  
この説明は本当に正しいのかどうか考えた。
- ③ [人] が [引用節] と考える  
例：私は来年彼女と結婚しようと考えている。

(『日本語基本動詞用法辞典』 p.151)

上に挙げた文型のうち、①と③が「思う」と「考える」に共通する文型である。また、「思う」の文型②と、「考える」の文型②は、それぞれの語に固有のものである(注4)。

本稿における主な考察対象は、文型③の「思う」と「考える」ということになる(注5)が、文型③と類似する文型に「～を…と思う(考える)」という文型がある。

(2) 弘は先生の説明をどこかおかしいと考えた。

(『日本語基本動詞用法辞典』 p.151、下線は引用者による)

(3) 私は便宜的に、その頭骨のかつての持ち主を一角獣であると考えることにした。そう考えないものごとが前に進まないのだ。

(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 p.269) (注6)

この文型は「思う」と「考える」に共通の文型であり、また文型③との連続性も認められる(注7)ため、本稿の考察対象に含めるが、「思う」と「考える」の文型を記述する上で、文型③との相違点を明らかにする必要がある。

以下では、この文型についての考察を通して、この文型を本稿における「文型(=動詞と動詞が要求する必須成分とから成るまとまり)」として認定すべきかどうかを検討する。

文型に関する情報が豊富な『日本語基本動詞用法辞典』は、「～を…と思う(考える)」にあたる文型を以下のような形で提示している。

「思う」

[人] {が／は} [人・物・事] を述語と思う (p.105)

「考える」

[人] {が／は} [事] を述語と考える。 (p.151)

これを見ると、「…と」の「…」にあたる部分を単に「述語」としているが、このままでは明らかに不十分である。「…と」の成分になれる述語のタイプには何らかの制限があるようである。以下では、どのような制限があるのかを具体的に見ることにする。

まず、上に挙げた例文(2)と(3)から、形容詞述語と名詞述語(「名詞+だ」の形)は「…と」の成分になれることがわかる。さらに、次の例を見ると、名詞も「…と」の成分になれるようである。

(4) 「そうですかい」木下は少し喋りやすくなった様子だった。すでに七瀬のことを女子大生と考える以外にない、と結論づけていた。

(『エディプスの恋人』 p.132)

一方、「…と」の成分が動詞述語である場合を想定してみると、以下の例のように、非文法的であることがわかる。

(5) a 彼は明日学校に来ると思う。

b \* 彼を明日学校に来ると思う。

また、「ある」や「いる」のような「存在」を表す動詞述語も、「…と」の成分にはなれない。

(6) a この本は図書館にあると思う。

b \* この本を図書館にあると思う。

しかし、動詞述語のすべてが「…と」の成分になれないわけではないようである。

(7) a 太郎君のアイデアは花子さんのアイデアより優れていると思う。

b ? 太郎君のアイデアを花子さんのアイデアより優れていると思う。

c 太郎君のアイデアを花子さんのアイデアより優れていると思った。

(注8)

(2)~(5)から、状態性の強い述語であれば、「…と」の成分になれるのではないかという予測ができるが、この予測は(6) b が容認不可能であることによって覆される。そこで、例文(7)を見てみると、状態性の強い動詞述語の中でも、ヲ格名詞句に対して判定を下しているような性質を持つ語であれば、「…と」の成分になれることがわかるのである。

このように、この文型は、文型③との共通点がある一方、「…と」の成分に関して制限があるという相違点も認められる。また、「～を」も「…と」も両方が同時に共起しなければならない必須成分である。従って、本稿では、この文型を「思う」及び「考える」の文型の一つと認め、以下のような文型として認定する。

「思う」

④ [人] が [名詞 (句)] を [引用句] と思う

※引用句の成分は、名詞 (句) に対して判定を下す性質を持つ語 (名詞、形容詞、一部の動詞) に限られる。

「考える」

④ [人] が [名詞 (句)] を [引用句] と考える

※引用句の成分は、名詞 (句) に対して判定を下す性質を持つ語 (名詞、形容詞、一部の動詞) に限られる。

上の記述について補足すると、文型④では、文型③の引用節の主語に相当する部分がヲ格名詞句として現れているため、文型④ (= 「～を…と思う (考える)」) の「…と」の部分は、文型③の引用節と同一ではない。そこで、本稿では、文型③の [引用節] に対して、文型④の「…と」の部分を [引用句] と呼

ぶことにする。

### 3. 基本形文末用法の「と思う」

本節では、従来、「だろう」などのモダリティ形式との関係で問題とされてきた基本形文末用法の「と思う」について簡単に取り上げ、本稿での扱いを述べることにする（注9）。

基本形文末用法の「と思う」とは、以下の例のような、基本形（ここでは常体だけでなく、「と思います」のような敬体も含む）で文末に用いられている「思う」のことであり、場合によっては、「だろう」などと同様、引用成分で表される内容が「不確実」なものであることを示すといった機能を担っていると考えられるものである（(8)における「と思います」を「でしょう」に置き換えても文全体の意味が大きく変わることはない）。

(8) 彼はもう大学に来ている と思います。

森山（1992）は、このような「と思う」を「文末思考動詞」と呼び、その用法を大きく「不確実表示用法」と「主観明示用法」とに分けている（注10）。

「不確実表示用法」とは、その情報があくまで個人的なものであることを断ることにより、その情報が不確実なものであることを表示するという用法である。(8)における「と思う」がこの用法の「と思う」に相当する。

一方、「主観明示用法」とは、その情報が個人的・主観的なものであることを敢えて明らかにすることにより、主張を和らげるという用法である。以下の例(9)(10)における「と思う」がこの用法の「と思う」に相当する。

(9) 日本の今の医療制度は間違っていると思う。

(10) 乾杯したいと思います。(森山（1992）の例文(23)と(27))

本稿では、このような「と思う」（「と考える」）についても、意味論レベルの意味は他の引用節を伴うケースと同様であると考えられる。つまり、語の有する意味は同じでも、ある一定の環境に置かれることによって（ここでは基本形で文末に用いられることによって）、一時的にある種のモダリティ形式に近い機能を担うようになったと考えるわけである。

本稿では、このような場合の「と思う」（「と考える」）が担う機能についてはこれ以上取り上げないこととする。尚、分析に際しては、語の意味そのものを純粹に抽出しやすい基本形文末用法以外の例を主な考察対象とする。

## 4. 先行研究

引用節を伴う「思う」と「考える」を扱っている先行研究には森田（1989）、加藤（1997）がある（注11）。

森田（1989）は「思う」の基本的な意味を「判断・決心・推量・願望・想像・回想・恋慕などの対象として、人・物・事柄などを取り上げ、それについて心を働かせる」（p.264）と記述し、さらに具体例をいくつか挙げ、それぞれの「思う」について類義語を示すという形で説明を試みている（「やろうと思ったことは最後までやり通せ」（決意、決心）、「はやく雨が止めばいいと思う」（願望）など）。ここで問題となるのは、「決意」「決心」「願望」などが、果たして「思う」が担っている意味なのかという点である。これらの心的態度は「思う」自体が担っているものではなく、引用成分によって表されているものであると思われる。従って、森田（1989）の記述は「思う」の意味そのものを説明するものとは言えない。

一方、加藤（1997）は引用節内の成分のうち、「だろう」「そうだ」「らしい」などのモダリティ形式に注目し、それらが節の内部に共起できるかどうかを調べることによって「思う」と「考える」の意味的相違を明らかにしようとしている。しかし、このように引用節内の一部に考察範囲を限定していることが原因で、「思う」と「考える」の意味的特徴を十分に記述しきれていないように思われる。本稿では、引用節内の成分全体を視野に入れることによって、より包括的な意味記述を目指す。

## 5. 分析

本節では、引用節を伴う「思う」と「考える」を比較することにより、両動詞の意味的な共通点、相違点を明らかにする。

まず、5. 1で分析の枠組みを提示し、5. 2で「思う」、5. 3で「考える」の意味記述を試みる。5. 4では、分析のまとめとして、「思う」と「考える」の多義構造を示す。

### 5. 1. 分析の枠組み

本稿では、「思う」と「考える」それぞれに、一つの「基本的意味」を認定し、「基本的意味」が言語的環境の影響を受けた結果、複数の「別義」（＝多義

語が持つ複数の意味（の一つ）に分化する、という考え方をとる。ここでの「基本的意味」とは、その語が表す具体的なレベルにおける意味（別義）の原型とも言えるものであり、それが具体的な引用成分を伴うことによって特定化され、別義として表れるというわけである（注12）。

また、本稿における「基本的意味」の特徴として、必ず類義語との弁別の特徴を含むという点が挙げられる。これは、「基本的意味」をその語に固有の意味とする以上、その語のみが有する固有の意味特徴を必ず含むものとして規定する必要があると考えるからである（注13）。

## 5. 2. 「思う」の意味

以下では、まず別義を認定した上で、別義から弁別の特徴を抽出し、基本的意味を認定するという流れで分析を進めていく。5. 3も同様である。また、別義認定に際しては、「類義語の違い」を主な基準とする（注14）。

### 5. 2. 1. 「思う」の別義

- ・別義1：<（外部からの刺激により）主体内部に生じた感情・感覚を>  
<意識する> （「考える」に置き換え不可能）

まずは、「思う」の別義のうち、「考える」に置き換えられないものを取り上げる。

- (11) 「若い男よ。——なかなかハンサムだったなあ」  
「何か特徴は？」  
「そんなのないわよ。なんとなくしか憶えてないもの。ただ、いい男だな、と思ったことを憶えてるだけ」  
(『女社長に乾杯！』 p.823)
- (12) 「やっぱりニューヨークが面白そうだった」  
「どんなふう？」  
「この町なら暮らしてみてもいいな、と思ったよ。そんなことを感じた街は他に香港しかないんだけどね、俺には」  
(『一瞬の夏』 p.550)
- (13) 振り返るとバフィーが突っ立っていて、その横には豊かなあごひげをたくわえた大男が並んで私を見下ろしていた。あれれと思い、バフィーの顔を覗き込むと、  
「デミアン、彼マイクよ」  
とぶっきらぼうに紹介した。 (『若き数学者のアメリカ』 p.213)
- (14) 「ごめんなさい、てっきりパパかと思ったの。あなたパパのお使い？」

(『女社長に乾杯!』 p.206)

上の例は、いずれも、外部からの「刺激」によって生じた「感情」(注15)の具体的な内容が引用成分で表されている。(11)であれば、話し手(主体)が「若い男」を見たことによって、主体内部に「いい男だな」といった感情が生じたことを表しており、(12)であれば、ニューヨークを見たことによって、「この街なら暮らしてみてもいいな」といった感情が主体内部に生じたことを表していると言える。これらは、何らかの「刺激」が原因で主体内部に生じた感情であることから、精神的な「反応」と呼ぶことのできるものである。特に、(13)のように、感情の内容というよりは、心の動きそのものが引用成分である場合、「反応」といった側面が強く表れているように思われる。

但し、別義1の「思う」には、「刺激」が不明確な場合もある。以下の(15)は、「ふと」(注16)が共起していることにより、「刺激」の存在が不明確であることが示されている。

(15) 試合の翌日は、調整練習がある。

放課後、太郎は服を着換えてグラウンドに出た。ふと、おふくろの奴、もう病院から帰って来たかな、と思った。

(『太郎物語』 p.510)

このように、別義1の「思う」には、「刺激」の存在が明確な場合、言い換えれば、典型的な「反応」と呼べる場合と、「刺激」の存在が不明確な場合の二つがあることになる。上の意味記述では、この点を<外部からの刺激により>という意味特徴を括弧に括ることによって表している。

## ・別義2：<主体内部に存在する判断内容を><意識する>

※<判断内容>とは、主体の意志的な思考活動によって導かれた内容を指す。(「考える」に置き換え可能)

(16) 三階を選んだのは、最上階であるから天井からの物音に悩まされることがあるまいと思ったからである。

(『若き数学者のアメリカ』 p.301)

(17) 三人のうちの一人である。もちろんそれでホームタウン・デシジョンが防げるはずはない。しかし、日本人のジャッジ・ペーパーが一枚でも残っていれば、優勢にもかかわらず判定負けを喫したとしても内藤の健闘は理解されると思ったのだ。

(『一瞬の夏』 p.1064)

(16)と(17)に共通しているのは、いずれの引用成分も、その背後に主体の意志的な思考活動が想定されるという点である。これは、引用成分が主体の「反応」



・別義2：＜知力を働かせて＞＜結論を導く＞

(「思う」に置き換え可能)

一方で、別義2の「考える」は、「思う」に置き換えることができる「考える」である。

- (20) 八月中旬のむし暑い昼下りに、私はこのアナーバーに到着した。あらかじめ手配してあった、町で一番の高層アパート、タワープラザの十四階にただちに入居した。両手いっぱいの荷物を下ろすと同時に、商店の閉まらぬうちに買物をすまそうと考えた。シーツ、枕とかパンなどはその日から必要だからである。

(『若き数学者のアメリカ』 pp.98-99)

- (21) 「ジュンのファイトマネー、少ないね。どうしてですか」  
「それはね、エディさん。もうちゃんと内藤に説明してあるんですよ」  
金子はそう答えたが、一応エディにも説明しておいた方がいいと判断したらしく、なぜその額になったのかを話しはじめた。しかし、うまく言葉が通じないため、金子は私を呼んだ。私に納得してもらえば、エディも納得してくれるだろうと考えたようだった。

(『一瞬の夏』 pp.1010-1011)

- (22) 病院を売って間もなく、彼は北海道に相当の開拓地を買った。いよいよとなったときは農場を経営して暮そうと考えたからである。

(『楡家の人びと』 p.1992)

上の例は、いずれも、知力を働かせた結果、導かれた「結論」の内容が引用成分によって表されている。引用成分が「思考過程」である別義1と比較すると、別義2の引用成分は「思考内容」と呼ぶことのできるものである。

このように、別義1の引用成分が「思考過程」を表し、別義2の引用成分が「思考内容」(「結論」)を表しているとする、別義1の「考える」はあくまでプロセスを表しているだけであるのに対し、別義2の「考える」は＜知力を働かせる＞というプロセスに加えて、＜ある結論を導く＞という段階までを含意していると考えることができる。言い換えれば、別義1は動きの「過程」に焦点が置かれている意味であるのに対して、別義2は動きの「結果」に焦点が置かれている意味であると言えるわけである。上の意味記述では、別義1で前半に位置していた＜結論を導くために＞という意味特徴を、＜結論を導く＞という形で後半に置くことにより、別義2が「結果」に焦点が置かれた意味であることを表している。

・別義3：＜ある事態を＞＜仮定する＞

(「思う」に置き換え不可能)

別義3は、別義2と同様、引用成分が「思考内容」であるものの、「思う」に置き換えることができない意味である。

- (23) たとえば地球が球状の物体ではなく巨大なコーヒー・テーブルであると考えたところで、日常生活のレベルでいったいどれほどの不都合があるだろう？

(『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 p.20)

- (24) 日本では内藤の再起第一戦が待っている。たとえその試合に千人の客しか集まらないとしても、私にとっては、七万余の大観衆を集めたアリの試合より、はるかに大事なのだ。とすれば、私がニューオーリンズで見たアリの試合は、内藤の再起戦のための前座試合だったと考えることができるのではないか。そうだ、「ザ・バトル・オブ・ニューオーリンズ」は、私にとって、内藤の試合のための壮大な前座試合だったのだ。  
(『一瞬の夏』 p.409)

- (25) 「そうですかい」

木下は少し喋りやすくなった様子だった。すでに七瀬のことを、女子大生と考える以外にない、と結論づけていた。  
(4)を再掲)

上の例における「考える」は、ある既知の事柄(事物、事態)に対して、主体が意図的に意味づけを行っている場合の「考える」である。(24)を例にとってみると、思考主体にとって既知の事柄である「ニューオーリンズで見たアリの試合」について、主体自らが「内藤の再起戦のための前座試合」と意図的に意味づけをしている(仮定している)わけである。

それでは、同じく引用成分によって「思考内容」が表されている別義2とはどのような違いがあるのだろうか。別義2との違いは、以下のように、意志形の使用の可否に表れる。

- (26) a 八月中旬のむし暑い昼下りに、私はこのアナーバーに到着した。あらかじめ手配してあった、町で一番の高層アパート、タワープラザの十四階にただちに入居した。両手いっぱい荷物を下ろすと同時に、商店の閉まらぬうちに買物をすまそうと考えた。シーツ、枕とかパンなどはその日から必要だからである。  
(20)を再掲)

b ??商店の閉まらぬうちに買物をすまそうと考えよう。

- (27) a たとえば地球が球状の物体ではなく巨大なコーヒー・テーブルであると考えたところで、日常生活のレベルでいったいどれほどの不都合があるだろう？  
(23)を再掲)

- b たとえば地球が球状の物体ではなく巨大なコーヒー・テーブルであると考えよう。

このように、別義2の「考える」(例文26)は、意志形にした場合、容認度が落ちるが、別義3の「考える」(例文27)は意志形にしても容認度が落ちない。

ここから、別義3の引用成分である「仮定された事態」は、別義2の引用成分である「結論」と同様、「思考内容」の一つと言えるものの、「結論」は意志的にコントロールできない内容であるのに対し、「仮定された事態」はその内容までを主体が意志的にコントロールしているという違いがあると考えることができる。以下では、この違いを、図を用いてさらに詳しく考察する。

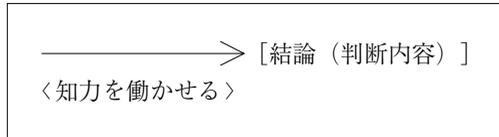


図1

図1は、「引用節+と考える(思う)」という言語形式が表す意味内容を図示したものである。「考える」は〈知力を働かせる〉(図1の矢印)部分は自らの意志でコントロールできる。しかし、「結論」の具体的な内容まではコントロールできないのではないと思われる。そのため、コントロールできない「結論」を引用成分として含んでいる別義2の「考える」は、表現全体(図1の全体)としてもコントロールできない動きを表すことになると考えられる。一方、別義3のように、引用成分で表される内容までがコントロール可能な場合には、表現全体としても意志性を有することになると考えられるのである(注18)。

尚、「考える」は、別義2のように引用成分が「結論」であっても、つまり、「結果」に焦点がある場合でも、「過程」(図1の矢印部分)が常に背後に存在するが、「思う」は「過程」がない場合(別義1)とある場合(別義2)の両方を表せることから、そもそも「過程」を問題にせず、「結果」のみを取り上げる動詞であると言える。

### 5. 3. 2. 「考える」の基本的意味と弁別的特徴

「考える」の特徴のうち、「思う」の〈反応〉という弁別的特徴とは相容れないものとして、「過程に焦点が置かれている」という点(別義1)と、「結果の内容までコントロールできる」という点(別義3)の二つを認めることができ

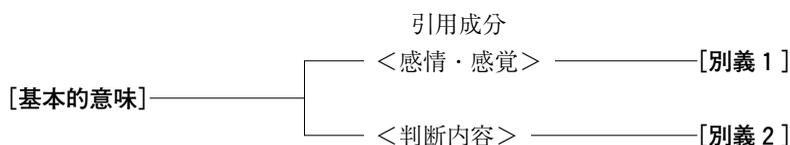
る。ここから、「考える」は「結論」を導こうとする（場合によってはその内容まで規定しようとする）強い＜目的意識＞があると言えることができる。このような特徴を踏まえ、本稿では「考える」の基本的意味を以下のように記述する。

- ・ **基本的意味**＜（結論を導くという）目的意識を持って＞＜知力を働かせる＞

#### 5. 4. 引用節を伴う「思う」と「考える」の多義構造

5節、及び本稿のまとめとして、以下に「思う」と「考える」の多義構造を示す。

- ・ 「思う」の多義構造



- ・ 「考える」の多義構造



### 注

- (1) 森田（1989）は「「思う」は文型的に二つに分かれる」（p.264）とし、「～と思う」と「～を思う」を区別している。また、「思う」と「考える」の文型をかなり細分化しているものとして、『日本語基本動詞用法辞典』がある。
- (2) 本稿では、形容詞と呼ばれる「悲しい」「うれしい」のような語と、形容動詞と呼ばれる「変だ」「不思議だ」のような語を合わせて「形容詞」と呼ぶことにする。
- (3) 藤田（1981）は、「美しく思う」のような「述語の内容をくわしく示す修飾」を「内的修飾」、「くわしく考える」のような「述語のあり方を規定する修飾」を「外的修飾」と呼び、さらに内的修飾・被修飾の統辞関係を「準引用」と呼んでいる。本稿における「思う」の文型②は、この「準引用」に相当するものである。
- (4) 但し、稀にはあるが、「考える」にも「思う」の文型②に相当する例が見

られる（例えば「事態を重く考える」など）。

- (5) 引用節を伴う（文型③）の「思う」、「考える」と並んで、重要な考察対象となるケースに、ヲ格名詞句を伴う「思う」と「考える」（＝文型①の「思う」と「考える」）があるが、これについては高橋（2002）を参照。
- (6) 実例中の分析対象語句に施されている下線は、筆者によるものである。
- (7) 文型③と「～を…と思う（考える）」という文型の連続性について、森山（1988）に次のような指摘がある。

引用成分が、引用成分のなかから抽出される場合がある。すなわち、Aガ「BハCダ」ト思ウ（引用型）→AガBヲ「Cダ」ト思ウ（引用繰り出し型）→AガBヲCト思ウ（同定型）のような書き換えが可能である。同定型では、ト格の意味は、引用と言うべきか同定の「と」と言うべきか、微妙な境界上にある。このような一連の現象を引用成分の繰り出しと呼ぶことにする。（p.80、下線は引用者による）

また、藤田（1997）では、ヲ格名詞句と「…と」が「ネクサスのな構造をとったもの」（p.39）として、以下の例が挙げられている。

（ア）彼は、それをダメだと言った／思った。（藤田（1997）の例文（イ））

- (8) 理由は不明だが、(7)のbとcには容認度に差がある。
- (9) 「考える」にも同様の用法があるが、日常の会話では使われにくく、かなり改まった場面に使用が限定されている。

（イ）彼はもう大学に来ている | と思います／??と考えます|。

（ウ）その主張は妥当なものではないと考えます。

これは、「考える」が常に背後に意志的な思考活動の存在を含意するため、「考えた結果がこれだ」といった強い主張になりすぎるとは思わないかと思われる（詳しくは後述）。

- (10) ここでは、基本形文末用法の「と思う」を扱っている研究の中でも先駆的なものとして森山（1992）を取り上げたが、他にも宮崎（1999）、高橋（2001）、小野（2001）など、このタイプの「と思う」を考察対象とする論考は数多くある。
- (11) 「思う」と「考える」の類義語分析を行っている先行研究には、他に長嶋（1979）がある。但し、重点的に取り上げられているのはヲ格名詞句を伴う場合である。また、特に文型の違いを考慮していない点で、分析に不十分な点が見られるものの、参考にすべき点も多く、本稿も意味記述に関しては長嶋（1979）の成果に負うところが大きい。長嶋（1979）における、「思う」の<意識する>、「考える」の<知力を働かせる>といった意味特徴は、本稿でもそのままの形で継承している。

- (12) ここで、本稿における、このような意味観は、国広（1982）等で展開されている意義素論を踏まえたものであることを確認しておく。但し、細部の規定などは、良くも悪くも本稿独自のものである。
- (13) 弁別の特徴を基本的意味に含めることにより、基本的意味を抽出する際に一般化しすぎて、基本的意味のレベルで類義語間の意味的相違がなくなってしまう（つまり、二つの語が同じ意味になってしまう）といった事態を避けることができる。高橋（2002）におけるヲ格名詞句を伴う「思う」と「考える」の分析では、この規定が有効に機能している（詳しくは高橋（2002）を参照）。
- (14) 多義語における別義認定の基準については初山（1993）を参照。
- (15) ここでは、「感情」を「主体内部に生じた内容」全般といった、通常よりやや広い意味で用いている。(14)の「(てつきり) パパか」のような引用成分は、悲しみや喜びといった通常の感情には当たらないが、このような内容も本稿では「感情」の一つとする。
- (16) 李（2000）によれば、「ふと」は<話し手の><瞬間的に行う行為に><明確な理由や原因が存在しない様子を表す>副詞である。
- (17) 高橋（2002）では、この違いを<自己制御性>の違いとして考察している。「思う」は「? {悲しく・不思議に・変に} 思え」のように命令形にできない場合があることから<非自己制御性>（＝自分の意志ではコントロールできないという性質）を持つ動詞であるのに対し、「考える」は「ちゃんと考えろ」のように、常に命令形での使用が可能であることから、<達成の自己制御性>（＝動きの達成までを自分の意志でコントロールできるという性質）を持つ動詞である（詳しくは高橋（2002）を参照）。
- (18) 別義3の「考える」であっても、命令形での使用は不自然である。これは「仮定する」「みなす」といった行為が主体自らの判断と強く結びつく行為であり、通常他者から命令されて行うものではないからだと思われる。

## 引用文献

- 李 澤熊（2000）「主体の意図に関わる副詞（的機能を持つ表現）」の意味分析—非意図的であることを表す語を中心に— 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻修士論文
- 小野正樹（2001）「『ト思う』述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110号 日本語教育学会 pp.22-31

- 加藤理恵 (1997)「類義語の分析「思う」と「考える」 — 「と」節内に共起できる要素を中心にして—」 『ことばの科学』10号 名古屋大学言語文化部 言語文化研究会 pp.87-96
- 国広哲弥 (1982)『意味論の方法』 大修館書店
- 小泉保・船城道雄・本多 治・仁田義雄・塚本秀樹編 (1989)『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 高橋圭介 (2001)「思考動詞の意味分析—「思う」と「考える」を中心に—」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻修士論文  
(2002)「類義語「思う」と「考える」の意味分析—類義関係にある語の多義記述試論—」 『日本語文法』 2巻1号 日本語文法学会 pp.190-210
- 長嶋善郎 (1979)「オモウ・カンガエル」 柴田武編『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』 平凡社 pp.104-112
- 藤田保幸 (1981)「準引用」 『待兼山論叢 (文学篇)』15号 大阪大学文学部 pp.1-16  
(1997)「引用構文と「格」の論」 『滋賀大國文』35号 pp.21-41
- 宮崎和人 (1999)「モダリティ論から見た「~と思う」」 『待兼山論叢』 33号 大阪大学大学院文学研究科 pp.1-16
- 初山洋介(1993)「多義語分析の方法 —多義的別義の認定をめぐる—」 『日本語・日本文化論集』 1巻 名古屋大学留学生センター pp.35-57
- 森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』 角川書店
- 森山卓郎 (1988)『日本語動詞述語文の研究』 明治書院  
(1992)「文末思考動詞「思う」をめぐる—一文の意味としての主観性・客観性—」 『日本語学』 11巻9号 明治書院 pp.105-116

## 実例出典

- ・ CD-ROM版『新潮文庫の100冊』